

褻

褻の古字は褻。衣と口口と褻との合字です。褻 (褻) は、人が土仕事をしている形です。褻(ジョウ)は、発音が「上」と全く同じなので「上る」という意味に使われるこ

とが多く人名などで“のぼる”と読めますが、本義は“上衣をぬいで、口口にわいわい話しながら畑仕事をする”ことです。話しながら仕事すると、能率が“上がる”ので「上^{ジョウ}」という音になったのかも知れません。

釀は、酒と褻との会意形声字です。“かもす”こと。酒がぶつぶつと言って発酵することです。“ぶつぶつ言う”意味の褻と、“泡が上がる”意味の上とどちらからでも理解できる字です。釀造(酒)。

讓は、“ぶつぶつ言う”意味の褻と言とでできていて“たがいに自分の主張を思いきり言い合う”のが本義です。酒が十分にぶつぶつ言えば、それが止んだとき、酒がりっぱにでき上がるように、人も十分に言いたいだけ言えば、自然と相手の立場がたがいによく分かりますので、“ゆずる”気持が自然と出てきます。讓は、今はもっぱら“ゆずる”意味に使われますが、本義が主張すべきことを十分に主張することにあるのは興味深いことではありませんか。「謙讓」とは、決してただ人の言うなりになることではありません。

穰は、禾(稲)と、酒が釀造される意味の褻とで、“稲が豊かにみのる”ことを表わした字です。「五穀豊穰」。人名では“みのる”と読まれます。

嬢は、釀造や豊穰の意味の褻と女(むすめ)とで、“りっぱに一人前に完成したむすめ”という意味を表わした字です。良い女^{よ むすめ}という意味の「娘」は、嬢と発音も意味も全く同じなのですが、今では、娘は“むすめ”、嬢はお嬢さんというように使い分けされています。

壤は、畑仕事をする意味の褻と土とで“穀物を作り育てる土”という意味を表わしています。「土壌」とか「壤土」というのは、単に“土地”という意味ではなくて、“耕作のできる良い土地”という気持がこめられているのです。「天壤無窮」の「天壤」も同様に単に天地という意味ではありません。“物を生み育てる大地”という意味があるのです。

攘は、口口に言い合う意味の褻と手との会意形声字です。相手の意見を口でしりぞけるばかりでなく、手まで使うのが「攘」です。“手でしりぞける”つまり“はらいのける”ことです。「尊皇攘夷」は、皇室を尊^{えびす}び、夷(外国人)を日本から追い払うという意味で幕末時代に口にされた言葉です。